

■1 製品本体と淫紋システムのご紹介

「……満足したか？（あくび）今日も疲れてんだ。とっとと寝かせてくれよ」

「……お前らもしつこいな。毎日毎日ビシバシやってるけど、全然効かねえだろ？ いい加減学習しろっての」

「このヴァレイサ様はな……お前ら帝国の軟弱者に、どうにかできる相手じゃねえんだよ」

「おいおい。こんなに高く吊るしたってしょうがねえだろ。肝心の鞭打ちがへなちょこなんだからよお」

「ん？ ちゃんと当たってるぜ、お前の鞭？ でも効かねえ。アタシの鋼の肉体にや、こんなもん、なんてことねえなあ」

「ってか、なんだその宝石。さっきからピカピカ光って……」

「声を、記録している？ アタシの情けない悲鳴を、みんなに聞かせるために？ ……はあ？」

「なに言ってんだ？ お前らの拷問で、アタシが悲鳴をあげたことなんてねえだろ。どうやって記録すんだよ…あいたっ」

「なんだよ。あ？ まずはあいさつ？ おい、本当にいいのか？ アタシに好きに喋らせたなら、誰も買わなくなるんじゃないの」

「こんなにおっかない女戦士、手に負えないよ～～ってな。それでもいいんなら、一発かましてやるけど」

「……よう、ご主人様。アンタも災難だな。こんな、恐ろしい奴隷を買っちゃうなんてよ」

「アタシはヴァレイサ。アメガンの女傭兵だ。部族の中じゃ一番の腕っぷしでよ、斧熊(おのぐま)ヴァレイサ、なんて呼ばれてた」

「気ままに傭兵やってたんだけどよ、このクソ帝国のクソ商人に雇われたのが良くなかった」

「入国手形に不備がある、なんて呼び出されてな。のこのこ着いてったらこのザマだ」

「ちょっと前に、王国……ロツツェンの流民を助けたのが気に食わなかったらしい。器の小せえやつらだよなあ」

「不意打ちで気絶させられて……気付いたら、身ぐるみ剥がれて監獄送りだよ。ギッチギチに鎖で縛られて、不自由ったらありやしねえ」

「今も、手枷足枷ハメられて宙吊りにされてんだ。アタシのことがよっぽど怖いみてえだなあ」

「しかもな、この監獄ヒドいんだよ。年端もいかねえガキまで捕まえて、地下の施設で働かせてやる」

「アタシ、体がデカいから頼られちまってさ。そいつらのこと手伝ってやってんだ。やさしいだろ〜」

「ん。そーだ。アタシを買ったってことは、アタシの体を見たってことだよな？ このデッカい体をよ」

「ふっとい腕と足、バッキバキの腹、鍛え抜かれたムキムキのガタイ。へへっ、すげえだろ？」

「今だって、帝国のヘボ兵士が必死に鞭打ってるけどよ。なんてことねえ。鞭で打たれても、腹ア殴られても……おっと」

「はっ。顔真っ赤にして怒ってら。オラオラ、もっと気合い入れて叩けよ。まさか、お前の方が先に疲れちゃったかあ？」

「その意気だよ。蛮族の女に奴隷の作法を叩き込むんだろ？ このデカい胸と尻をいたぶって、足腰立たなくするんだろー？」

「おら、お前らが勝てないと、未来のご主人様が怖がっちゃうじゃねーか。ほら。がーんばれ。がーんばれ」

「あーあ。諦めちまった。肩で息なんてしちゃってよ。なっさけねーなあ、おい」

「なに睨んでんだ？ ムカつくなら黙らせてみな。ま、お前らじゃ絶対に無理だろうけどよ。ん……？」

「なんだ、魔法か？ ありがてえな。この間のビリビリはいい刺激になったし。最近はずっと素っ裸で寒いから、炎でも……おおッ♥」

「んあッ？ な、なんだあッ？ は、腹が、焼け……ん`んんッ♥ あ、あッづ……ううッ……！」

「へっ、へへッ…！ やるじゃん、こんな魔法、使えたんだなあ……お`ッ。でも、でもなあ……！」

「このヴァレイサ様を泣かせるには、少し火力が足りねえなア…ッ！」

「はアッ、はアー―ッ…！ ったく、力で勝てねえからって、こんなもんに頼りやがって……」

「だけど……アテが外れたな？ 結局、お前らがなにをやっても、アタシは……おあ`ッ！？」

「あッ…ああッ……！？ なんだ、これッ……♥ んふっ、おッ……♥ く、おおおッ……！」

「は、腹が、あづっ…♥ ん`ん……っ♥ おっ、ふうっ、おおお……♥ く、くそっ、もっと、腹に、力を……っ♥」

「んんん……っ♥ ちくしょうッ、これ、なんだ……？ 触られてもいねえのに……おおっ♥」

「淫紋、だと？ おっ！ ぐおっ♥ やめろっ！ こんな使わず.....ふうおっ♥ 疼く.....♥ おおーっ♥ 腹ッ♥ 腹が疼くウツ.....♥」

「ぐっひっ♥ なんだよ、これえ♥ おおおおッ...♥ 奥がッ、熱い...っ♥ 腹ん中、あつついので、チクチクされてえ.....っ♥」

「んおっ♥ ソクゾクッ♥ ソクゾクくるッ♥ なんだこれッ♥ やめろッ、もうやめッ、んおおお〜ッ！」

「あッ、ぐああーッ♥ どめろおッ♥ 腹ん中焼けるッ！ おがしくなるッ♥ おッ！ おおお〜〜〜ッ♥」

「抑えられねえッ♥ 声出るッ♥ なんかくるッ、くるッ♥ うおッ、おおおッ♥」

「おおッ、あああああ————ッ♥♥」

「はーっ.....♥ はーっ.....♥ ち、ちくしょ〜〜.....普通にやっても勝てねえからって、こんな魔法を.....♥」

「イ、イッた...？ アタシが？ バカ言え。ちょっと腹が熱くなって、股がむずがゆくなっただけだ。こんなんで、気持ち良くなったり.....おっ♥」

「こ、こんなもんを使ってもな.....アタシは、女を金で買うようなクズのおもちゃになんて.....ああッ♥ んんんう...ッ♥」

「やめろッ！ もう、それ使うなあ...ッ♥ こんな声、聞かせるわけにはっ.....♥ アタシは、強くておっかない女傭兵の.....」

「おッ♥ おおッ♥ ちがうッ、ちがう♥ まけねえッ♥ 性奴隷になんて.....うおおお...ッ！」

「ふーッ！ ふーッ！ んッ、んんッ♥ ヘッ...そうだッ、いつもみたいに、気合い、入れて、ふおおおッ.....！」

「あッ♥ は、腹が疼いてもッ、腹筋、締めてえッ！ おおおッ！ よし、よし.....っ！」

「はあーっ、はあーっ.....！ ど、どうだっ！ もうっ、もう効かねえぞ.....おっ♥」

「へへ...鬱陶しい、魔法だったけど...んっ♥ このバキバキの腹筋には、勝てなかったなあ.....」

「だから、もう諦めろ。この淫紋でも、アタシには勝てねえ。分かっただろ。だから.....ふあああああッ♥」

「なッ、なななッ、なに触ってんだ！ ぶっ飛ばすって言ったろうが！ おまつ、んひゃあああッ♥」

「ん`あッ♥ あああッ♥ どこに指入れてんだッ♥ ゆるさねッ、んああッ♥ やめろ、そんなとこ、いじんなあ.....っ♥」

「はあうっ♥ んんッ、ううっ♥ チクショウ、ちくしょうッ！ このアタシが、指一本で、こんなア……ッ♥」

「んひっ♥ くッ、いィん♥ あああっ♥ あふっ……うあっ♥ あああああ～～～っ♥」

「は一つ……♥ は一つ……♥ い、イってねえ……！ お前らみたいなのに、気持ち良くされるわけがねえ…！」

「どんな魔法を使われたって、アメガンの加護が守ってくれる。それで、もっと、腹に力を込めれば……おおおッ♥」

「て、てめえら、まだッ…♥ あッ♥ し、しつこいんだよ、ああうッ♥ う、ううッ……！」

「そんなに嬉しいか、ああ？ アタシを、泣かせんのが……んんんッ♥」

「い、今まで、一度も勝てなかったもんなあ… だからって、ウキウキで弄りやがってよ……おおんッ♥」

「み、認めてやるよ…ッ♥ 効く、すげえ効く…！ おおッ♥ 体、震えて、声、抑えられねえ…♥ でもな……」

「はじめては、いつもそうなのさ……んくッ。魔物に切り裂かれた時も、槍で貫かれた時も……おっ♥」

「も、もがき苦しんで、痛み慣れていった。戦士ってのはそういうもんさ。だから、んんっ♥ 今度も同じだ…！」

「てめえらがどんな卑怯な手を使っても、アタシは負けねえ。淫紋だろうがなんだろうが……うおッ♥♥」

「ぐうッ……慣れることは、ない……？ 責められるほどに、淫紋は体を蝕む……？ う、うるせえっ♥ ふッ、くうッ♥」

「おっ♥ おっ、おまつ、お前えっ！ アタシを買い取って、どんな風にいたぶるか、ニヤニヤしてんだろうが…っ♥ ああっ♥」

「ふん、絶対、後悔するからなあ♥ アタシは、おっ♥ お前になにされたって、こんな風に、喘がねえぞ……っ♥」

「それで、それで……いつか、アンタをぶっ飛ばして、自由になってやる。それでもいいなら……アタシを買ってみな、ご主人様」

■2 製品の弱点と効果的な躰方法のご紹介

「ん`お`ッ！？ お`おおッ♥ うっ、うううっ♥ いいッ、お`おお———ッ♥♥」

「やめろッ、もう...そこイジるのやめろおッ！ てめえら、よってたかってッ、ああ、んっぐううッ...♥」

「お`ッあ`ッ♥♥ ん`あああア~~ッ.....♥ うッ、ううッ、ふうッ、んぬう~~~ッ.....♥♥」

「た、耐えてやるッ...♥ おおおッ...！ もう、お前らの好きには.....」

「くおおおおおッ♥♥ おふッ♥ ち、ちくしょうッ、そればっかりッ♥ ああッ♥ やめ、ろオ.....ッ♥」

「くそッ、くそおおおッ.....♥ なんで、こんなに...ッ♥ うあッ♥ あッ、熱いッ♥ いいいいッ.....♥」

「ふお`あああッ♥ そんなッ、突っ込むなアッ♥ んぎッ♥ ふぎいいッ♥♥ イッ、イッ、イ.....ッ！」

「んんん`ッ！ ふあ`あッ♥ あッ♥ ひい`あ`あああああああ———ッ♥♥」

「は~~ッ.....♥ は~~ッ.....♥」

「イ、イって、ねえよ.....♥ お前らに、イカされたことなんて、ねえ.....へ、へへ.....」

「一晩中、休みなしに責めやがって.....うっ...♥ くそ、こんな魔法がなければ、お前らなんかに.....」

「.....ああ？ そうだろうがよ。お前ら、淫紋を使わねえと、なにもできないヘナチヨコじゃねえか」

「そこで聞ってる未来のご主人様も、そうなんだろ？ 女が怖いから、魔法まで使って痛めつける」

「なにが、淫紋は体を蝕む、だよ。蝕まれてんのはお前らの頭.....んッ♥ ほら、な。都合が悪くなると、すぐこれだ」

「ふー、ふーッ♥ オラ、責めなくていいのか？ 今なら、お前らでもアタシに勝てるぜ？ 今だけ、な.....」

「オラ、かかってこいよ、へなちょこくん♥ 負けっぱなしの鬱憤、晴らしてみろ。アタシがこの快感に慣れる前に.....」

「...ん？ なんだ、終わりかよ？ 図星を突かれて恥ずかしくなったのか？ 少しは男らしいところもあるじゃねえか」

「ていうか、終わったなら離せよ。そろそろ強制労働の時間なんだ。あいつらの代わりに、働いてやらねえと.....んっ？」

「なんだ？ おい、なにしてんだよ。うっ、おい。聞いてんのか？ どこさわってんだ」

「.....もしかして、淫紋ナシでアタシを気持ちよくさせてえのか？ ははは！ 無理に決まってるだろ！」

「あー、あー、そうだな。さっきまではバカみたいにヨガってたよ。腹ン中が熱くてしょうがなかったさ」

「でもな、それは全部淫紋のせいだ。お前らに気持ち良くなんかされてねえ。はは。そう怒るなつて。ん...っ」

「へへ。おい、ご主人様。声だけじゃ、なにが起こってるか分からねえだろ？ アタシが説明してやるよ」

「今な、帝国のバカどもが、必死にアタシをイジってやがるんだ。大勢で手足を抑えつけて、大股開きの股間を責めてきやがる」

「...ッ♥ じゅぷじゅぷ、音立てながら、荒っぽく指を入れてな...時々、息なんて、吹きかけながら...ふぐっ」

「い、一生懸命、アタシを気持ちよくしようって、頑張ってるよ.....へへっ、でもな、効かねえ」

「あ、アメガン族の女はな、強い男にしか、体を許さねえんだ。こんな、淫紋頼りの弱っちいやつらに...うあっ...♥」

「ああ.....？ な、なんで.....うっ♥ ちげえよ、勘違いすんな。そこが濡れてるのは、さっきまでの責めで...ふぐっ♥」

「んん...っ♥ だから、勘違いすんなって...！ お前らみたいな、よってたかって女を痛めつけるようなヤツらに.....ふおおっ♥」

「ち、ちがう...ッ、ちがう、ちがう.....！ アタシは、アタシは.....おおっ♥」

「アソコ、くにくにされても.....っ♥ ナカを、かき回されてもオ、おお♥ きっ、気持ちよくなんて、ならねええ.....っ♥」

「ふーっ、ふーっ.....♥ ど、どうだ、思い知ったかあ.....分かったら、さっさと...ふおおッ♥」

「な、なんだっ.....？ いま、すげえビクって...んくおッ♥ やっ、やめりよッ.....そこ、つまむなあ.....っ！」

「んっひッ♥ そこだよっ、そこッ♥ マンコの近くの、コリコリしてる...んひいいッ♥ そ、そこおお.....ッ♥」

「しっ、しらねえよッ♥ 名前なんてしらねえッ！ ほおッ♥ ほ、本当に.....んッお〴〵おッ♥」

「クリ、トリス.....？ おッ♥ やめろっ♥ そこ、さわるなっ...！ くあああ.....♥ い、息を、当てるなあ.....ッ♥」

「はーっ♥ はーっ♥ ち、チクショウ..... いい気になってんじゃ、ねえぞ.....」

「今のは、ちょっと、ビックリしただけだ.....そこが気持ちいいって分かってんなら、アタシだって.....んぐうッ.....♥」

「クッ、クリ触られてもッ、お〴〵.....ッ♥ いじくられてもオ.....ッ♥ が、我慢ッ♥ ふんッ、んんんん.....ッ！」

「い、淫紋さえ、使われなきゃ.....んぐっ！ お前らなんかに.....ふああああっ♥ む、胸え.....っ♥」

「おっ♥ 乳、揉まれただけでこんな...ああっ♥ さ、さわるなッ、今おかしいっ、おかしいからっ、んぐうう.....ッ♥」

「ちっ、乳首ィ♥ 乳首つまむのやめろっ♥ うぎ...ッ♥ つ、つぶすなっ♥ シコシコするなっ♥ うおおッ.....」

「どうして...っ♥ 乳なんて、なにをされても感じなかったのに...ッ♥ 淫紋も使われてないのに、おおお.....ッ♥」

「まさか.....こういうことか.....っ♥ やられれば、やられるだけ、感じやすくなるって...っ♥ そんなことがあ...っ♥」

「う〜〜っ.....♥ ふう〜〜っ.....♥ んん.....っ♥ ふううう〜〜〜っ.....♥」

「うおっ...♥ き、きかねえっ...♥ きくわけねえっ...♥ このアタシが、おおっ♥ 魔法もナシに、こんな野郎に...ほおっ...♥」

「多少、体が敏感になっても.....ゾクゾクが、止まなくても.....絶対に、お前らには、負けねえ.....っ♥」

「おっ♥ んぐっ♥ んうう〜〜〜っ.....♥ うふっ...！ ふーっ、ふーっ♥ んっ、ぐううう〜〜〜.....！」

「...ああ？ さっきみたいに、どこを責められてるか、言えって.....？ くっ.....♥ そ、それは.....っ」

「き、気持ち良すぎて喋れないのか、だとっ！？ そんなワケねーだろ！ 全然、余裕だぜ.....っ！」

「いいか、よく聞け。アタシは今、んっ♥ あ、ちっ、乳首っ、乳首をっ、おおっ♥ ベしベし、指で弾かれてえ...んぎっ♥」

「だ、だらしねえデカ乳だと.....？ 馬鹿にすんなッ、これは、女神の加護の証で.....うおおッ♥」

「ちがうッ.....！ 弱点なんかじゃ、ねえ.....っ♥ アタシたちの胸は、女神の恵みで、部族の誇りで.....ッ♥ おおッ♥」

「強い戦士の、証なんだ.....っ♥ お前ら帝国人のおもちゃじゃねえ.....んおっ♥ よ、よわくねえ.....♥ 弱点なんかじゃ、んお.....っ♥」

「ほお～～っ……♥ ほお～～っ……♥ おっ♥ んっふ……っ♥ くんっふっ♥ う、うるせっ♥ 今、息、整えてんだっ」

「いっ、今アタシはっ、乳首を、おっ♥ 乳首コリコリされてっ♥ ほっ、ふっ♥ んんっ、んん～～っ……♥」

「んくおっ…♥ いろんな方向から、くっ♥ つんつん、いじくられて……っ♥ 反応を、じいっと、見られて……ふぐっ♥」

「こ、こいつらっ、乳首の一番感じるここ、探して……くおっ♥ おっ、ふう……っ♥」

「ふ、ふん……！ 無駄、だ…っ♥ アタシに、弱点なんて……んむお…っ♥ んふ～～ッ……♥ ふうう～～っ♥」

「んおッ、おおッ……♥ い、息を吹きかけるんじゃ……ふんっん……っ♥ おっ……くうう～～っ……♥ おっ、んんんん……♥」

「……おッ♥ いッ、いつまでっ、やってんだ……ッ♥ も、もう、あきらめろ♥ お前らじゃ、アタシは……ほお…ッ♥」

「いッ、いいッ…いッ……♥ ふうう～～～っ……♥ ふ～～っ♥ ふ～～っ♥ んん——っ……♥」

「わかった、だろ…… お前らみたいなの、雑魚じゃ……お…っ♥ とつとつ、淫紋を使って、終わらせ……っ♥」

「あ………？」

「く……っ♥ なるほど、な…… 道具に頼らねえと、アタシには、勝てねえもんなあ……」

「び、びびると、思ってたのか…？ それで指を潰された時も、声一つ、あげなかつただろ……はやく、やれよ……」

「くっ、くるならこいよっ！ 女神の加護を受けたこの体に、そんなもんが……ぐお…お…お…おッ♥♥」

「がッ、はッ……！？ お…お…あア……ッ♥ つ、つぶれッ……乳首ッ、潰れ……ッ、んにやあ…あ…あアッ♥♥」

「はッ、あ…あ…あ……ッ♥ お…ッ、お…おッ！ あッ、がッ、ぎ…いいイ……ッ♥ や、ヤバ……ッ、これッ、ぐあ…あ…あアッ♥♥」

「グリグリ、すんなアッ♥ 千切れッ、ふ…お…おッ♥ 乳首がッ……お…あ…あ…あアッ♥♥ 引っ張るなア♥♥ やめ……んっひ…ひ…ひ…ひッ♥♥」

「お…ッ…お…お…お……ッ♥ 嘘だ……ッ！ こんな、力づくに、挟まれて、潰されてエ……ッ♥」

「なんでッ、気持ちいいんだよオ……ッ♥ 淫紋が効いてるからって、おかしいだろオ……ッ♥ おふッ、ん`おおおおおッ♥♥」

「しゃ、喋るッ♥ 喋るから、ちょっと待てッ、おおッ♥ 乳首ッ、もう片方の乳首もッ♥ んお`ッ♥ ペンチで挟まれてえ……ッ♥」

「んんん〜っ♥ 思い切り、ねじられてッ♥ もう千切れるッ♥ 千切れちまうッ♥ もうやめろお`——ッ♥♥」

「……あがッ♥ ふッ…！ はあーっ……！ はあーっ……！ うッ、おおおッ……♥ こ、こんなの、耐えられる、わけ……っ♥」

「(はっ、と息をのむ) ぐッ、うう……ッ！ だめだ…！ 聞かれてるんだ、全部……！ アタシは、アタシは……！」

「こ、こいよ……どこでも責めてみろッ！ アタシはお前らの奴隷になんてならねえ！ 屈服なんてッ、ふん`んんッ……♥」

「ま、マンコ……ッ♥ ふっぎっ♥ や、柔らかいところ、ばっかりい……ッ♥ んっひ♥ ふぐッ、おッ……♥」

「きか、ねえぞ……ッ♥ こんなの……くうッ♥ 乳首に比べれば、なんてことねえ……ッ♥ だから、あ……」

「はっ、はっ、はっ、はっ……！ ま、まさか、やめろお前！ どこ狙ってんだッ！ おいッ！ やめろおッ！」

「この……ッ！ このクソ野郎ッ！ 女を縛って、一番弱いところ痛めつけて満足かよッ！ おいッ！」

「近づくな！ やめろッ、やめッ、ほオおおおおお————ッ♥♥」

「お`ッ、あ`ア……ッ♥ あッ、あああ……ッ♥ クリ、が……ッ♥ がッ、はッ……あ`ッ、お`ッ、ああ……ッ(失神)」

「ふんぎッ♥♥ やめりよッ！！ 何度もッ、おおお`ッ♥♥ クリ挟むなッ♥ しぬッ♥ しぬうううウ————ッ♥♥」

「ふぎゃあああッ♥♥ クリしぬッ♥♥ ちゅぶれるッ♥ あっぎッ♥♥ ふぐああああア————ッ♥♥」

「あ`、ああ`……ッ♥ お`、お……(失神)」

「う、うう……ッ く、おお…… まだ、続ける、つもりか…… もう、体が……おッ、おおおッ……♥」

「はっ、ふっ、はあ……♥ お、おお……っ♥ い、淫紋まで、使うのかよお……っ♥ こ、これじゃ、もう……」

「は一つ……♥ は一つ……♥ ぐ、そお……なんだよ、これえ……どれだけいたぶられても、全然慣れねえ……ツ♥」

「じんじんして、ビクビクして……ッ♥ 頭ン中、焼けるみたいに……うぎッ♥ あッ、話すッ、話すからッ……叩くな……ッ♥」

「よお、ご主人様。前は、いつだったっけか。クリをペンチでやられた時だったか？ クソッ、あの後の記憶がねえんだよな……」

「あれから何日か、徹底的に、クリと乳首いじめられてよ。今じゃ、鞭で弱点ぶっ叩かれて、簡単にマゾイキするように……」

「ああ、そうだな。アタシがアンタに買われた後も、ここをぶっ叩かれたら、なんでも言うことを聞いてやるよ」

「でもな、気を付けろよ。こうやって身動き封じてる分にはいいけど、喧嘩になったら、こんなところ狙えねえぞ？」

「アメガンの戦士は黒豹よりも素早いぜ。拘束が緩んで、逃げ出した時には……ぐああッ♥ あッ、ああッ……」

「お、おしゃべりで、悪かったな。ご主人様が退屈かと思ってよ、サービスしてやったんだよ……！」

「で、今日はなんだよ。またクリいじめか？ ったく、どれだけアタシをいたぶりたいんだか……ああ？ せ、性処理……！？」

「くっ、分かってたけどよ。女を買うってのはそういうことだって……でも……ふー」

「抵抗できない奴隷とセックスかよ。ダサイご主人様だな。誰にも相手にされないからって……ふぐおッ♥」

「おお……ッ♥ する、よお……ッ♥ ケツ突き出せば、いいんだろ……ッ」

「は～っ♥ は～っ♥ あ、アタシは、今、牝畜便器の姿勢を、とってる……」

「ケツ突き出して、自分の手で、あ…マ、マンコ、開いて……っ、突いてくれって……お願いする、姿勢だ……くっ、うう……っ」

「…うるせえ。はやく使えばいいだろ。こんなに辱めて、まだアタシになにかしろっていうのかよ…」

「んんんんッ……♥ おッ、ぐう……ッ♥ んッ、んんッ……！？」

「こ、これ……ッ♥ チンポじゃ、ねえ……っ！ かはっ、これ、おおッ♥ また、ヘンな道具を、おおおッ♥」

「ディ、ディルドー、だと……ッ♥ 先に、これで、マンコ耕す……？ 意味分からねえことを……おッ、お`おおッ♥♥」

「け、削れるっ♥ んッおうっ♥ ふぐっ、んんん.....っ！ ふーっ！ ふ〜〜〜〜っ.....！」

「お、お前らは、いつもそうだよな.....ッ♥ 自分に自信がないから、道具や、魔法に頼って.....ああッ♥」

「自分の力じゃ、無抵抗の女ひとり、屈服させられない.....！ 情けなくて、涙が出るぜ.....ッ！ お〴〵.....ッ♥」

「ほおーっ.....♥ ほおーっ.....♥ こ、こんなっ、んッ♥ こんなところ、ばっかり狙いやがって.....っ！」

「アタシの、おッ♥ かったい腹筋に勝てねえからってよお♥ 鍛えてない、腹ン中ばっかり.....ふっぎいっ.....♥」

「うぐうッ.....！ ふ、かいイ.....ッ♥ ど、どこまで...っ♥ ぐひッ！ んんんんッ♥♥」

「かッ、はッ.....！？ アッ、ああ.....ッ！ おッ♥ ほお〴〵.....ッ♥」

「ちくしょおッ、ちくしょおッ.....！ 負けないのにい.....！ こんな、道具を使わなければ.....ふぐおおッ♥♥」

「う、動いてエッ.....！？ んおおおおうッ♥♥ はっぐッ！？ ふ、震えてッ、おおッ！？ やめッ、やめろッ、やめろおおッ♥♥」

「んがッ♥ つくなッ♥ おく、つくなアッ♥♥ む〴ああッ♥ お〴あーッ♥ おッ、うぎあッ、ああッ♥」

「ん〴おうッ♥♥ やめりよッ♥ やめりよッ、ひきよーもんがアッ！！ お〴あッ♥ た、耐えられるか、こんなんッ」

「んなとこッ、鍛えてねえッ♥ マンコの奥なんてッ、お〴おうッ♥ どんなに力入れてもッ、うお〴おおおッ♥」

「腹筋、意味ねえじゃねえかッ♥ ナカからやられたらッ♥ んんんッ♥ か、勝てねえッ♥ おおおおーッ♥♥」

「ほじんなアッ♥ えぐんなあッ♥ がっは...ッ！ んぐッ♥ う、うう.....ッ♥」

「おッ♥♥ お〴お〴おおー.....ッ！」

「お〴、ほ.....ッ♥ あ〴あ、くそ.....ッ♥ こんな、こんな.....ッ」

「情けない、だと.....？ てめえのケツに突っ込んでみろよ.....こんな硬いので、腹ン中挟られたら、誰だって.....んっ」

「は一つ、は一つ.....！ ようやく、やるのか。へへ、楽しみだな.....？」

「ちげーよ。チンポがほしいんじゃねえ。淫売とか言うな。ちょっと、確かめたいんだよ……」

「"それ"になら……ぐっ♥ ち、チンポになら、勝てるかも、しれねえだろ……こんなに硬くねえし、動かねえだろうし……」

「なにより……おんなじ肉でできてるなら、アタシにだって勝ち目があるはずだ……今までよりは、ずっとな……」

「体と体のぶつけ合いなら……アタシが負けるはずがねえ……そうだ……アタシは、アメガンの……おっ♥♥」

「ふっぐう……っ♥ あっ、ああ……っ、んんう……っ♥ ふーっ♥ ふーっ……♥ んぐおっ♥ おっ♥」

「ほおっ♥ ほお～～っ……♥ こ、これは……っ♥ いや、でも、さっきよりは、んんんっ♥ う、動くなあ……っ♥ うはっ♥ ああっ♥」

「ううッ…！ こ、これぐらい、ならっ、あ、ああ……っ！ まだ、いける…！ だい、じょうぶ……！ 勝てる、かてるう……っ♥」

「くっ、へへっ…！ さっきまでは、腹ン中を、おっ。ご、ゴリゴリ削られて、息も、できなくなっけどよ……ほっ」

「やっぱり、体と体のぶつけ合いなら、アタシにも……おっ、んっ♥ う、動けて……？ ど、どうやって……」

「腰を、前後に……あぐっ♥ こ、これ、奥まで……な、なんでもねえ。おら、動いてやるよ。ん……っ♥ ふんっ……！」

「ふーっ、ふ～～っ！ どうだっ、おらッ♥ お前らじゃ、んんっ♥ か、敵わないだろ……っ♥」

「ふんっ……♥ ふう……っ♥ ほら、どうしたあ…？ なにか、おっ♥ 言ってみろよ……っ♥」

「これが、戦場で鍛えた、足腰だ…！ このアタシに、攻めさせたこと、後悔するんだなあ……！ おらッ、おらッ、おッ、ほお`おおおおおッ♥♥」

「お`ッ、んお`ッ……♥ ほーっ……♥ ほーっ……♥ い、淫紋、が…おおお`ッ♥ お、うおお……ッ♥」

「お、お前はっ、動くなよ…♥ アタシに、やらせ……ふう`んッ♥」

「ふかッ、ふかくッ、突くんじゃねえ…ッ♥ ち、チンポがッ、んぐっはアあああッ♥♥ あ`ッ、ああうう……ッ♥」

「くおっ♥ こしっ♥ 腰を、こすりつけんなあッ♥ おお`ッ、おくがッ♥ おくがッ、グリグリされてッ…♥」

「んぎッ♥ ふっぎいッ♥ むりッ、だァッ.....♥ これ以上、喋れねえ.....ッ♥ 腹が焼けるッ.....んんッ♥」

「はーッ、はーッ.....♥ ちくしょお.....♥ なんで、こんなに硬いんだよ.....ッ♥ 腹筋なら、アタシの方が、んぐひッ♥」

「あッ、ああッ♥ ご、ご主人様ァッ！ アタシは今ッ♥ おあッ♥ いま、やられてるッ♥ マンコやられてるうッ♥」

「わかんねッ♥ わかんねえッ♥ 突かれる度に、んぐッ♥ アタマおかしくなってッ♥ 説明できねえッ♥」

「おッ♥ は、はやく終われッ、はやくっ、だしてっ、んんんううッ♥」

「あがッ、髪を、ひっぱんなァ.....♥ おくに刺さるからあ.....♥ あッ♥ んあッ♥ あふああッ♥」

「たっ、たのむッ♥ はやくだせッ♥ おおおッ♥ おわってぐれッ♥ あだまおかしくなるッ♥ イカれるウッ♥」

「んおッ♥ ふうおッ♥ ふうおおおおお————ッ♥♥」

「あッ、あっづ.....ッ♥ あああ.....ッ♥ ナカが.....ッ、ぐおっ、おおおお.....♥」

「うッ、ううッ.....！ わかった、わかったよお.....！ アタシの負けだ。さっきのドーナツよりも、ずっと、やべえ.....」

「アタシを買うやつも、これ、持ってんのかッ♥ こんな、おおっ.....♥ さ、さわらないで、くれえ.....ッ♥」

「う、うう.....ッ！ どんな男にも、負けなかったのに.....許してくれなんて、言わなかったのに.....」

「くそっ、最悪の気分だ.....アタシが、アタシに、こんなに弱いところがあったなんて.....」

「ああ.....？ 前みたいに、全部自分で言えば、終わるだと.....？ 嘘つけ.....ッ♥ んなこと言って、最後はクリを、ペンチで.....んおあッ♥」

「ぐうッ.....♥ ど、どうせ、喋るまで、やられるんだ.....じゃあ.....く、くそ.....！」

「ご、ご主人様.....ッ！ 今から、う、うう.....ッ！ め、牝畜マンコの使い方を、教えてやるよ.....ッ！」

「ま、まず.....牝畜便器の姿勢って言ってくれ。そしたら、アタシが、ケツを突き上げて、マ、マンコを差し出すから、その後は.....んがああッ♥」

「ディルドッ♥ ディルドを使ってッ♥ 牝畜マンコをグチャグチャにしてッ.....♥ おッ♥ おおッ♥ もういいッ、もう十分ッ♥ もうやめてくれえッ♥♥」

「は～～ッ……♥ はあ～～ッ♥ うおッ、おッ……♥ ま、まってくれ……今、続きを……おッ♥」

「アタシがマゾイキして、メス汁噴いて、下ごしらえが、終わったら……マンコに、くおッ♥ チ、チンポを、入れて……ぐおッ♥」

「そ、そのままッ♥ 腰ッ、前後してッ♥ ガンガン突いてッ♥ くおッ、むうおッ♥」

「髪の毛、引つつかんでッ、んふおッ♥ 腰、叩きつけてッ♥ ガンガン、突いてくれッ♥」

「そしたら、おッ♥♥ アタシもうダメだッ♥ もう無理ッ♥ おふッ♥ んんん〴んおッ♥～～～ッ♥♥」

「淫紋使われて、おッ♥ マンコにいれられると、もう無理……ッ♥ おッ♥ どこって、そんなッ、そんなのッ、ふおッ♥」

「ぜ、全部だッ♥ マ、マンコ全部弱いッ♥ クリもッ、おくもッ♥ 全部弱いッ♥ ここ叩かれたら負けるッ♥ 負けるううー————ッ♥♥」

「うッ、ううう……ッ♥ 勝て、ない…… マンコじゃ、男には、敵わない……うぐッ…！？」

「やめろ、やめてくれ……ッ♥ もうわかった、十分だッ♥ 鍛えられないって、分かったから……ああああッ♥♥」

「はぐッ♥ ふああッ♥ イッ、イクッ♥ イッたばっかなのにッ、またッ、ふおッ♥ おッ、あッ♥ くああッ♥」

「もうッ、やめてくれッ♥ 突かないでッ♥ んぐおッ♥ おほおッ♥ 負けちゃうッ、またッ、うおッ♥」

■4 ストレス発散にしたい時は

「……うッ、んん……ッ、おッ……ッ♥ もう、オマンコやめて……♥ 弱いとこ、叩くの、もう……うッ」

「んッ、んん……？ なんだ…？ 次は、立ったまま、するのか……？ うぎッ」

「はあ……はあ……んぐッ！ な、なんだよ。今さら鞭なんて、どういづもり……あッ……ッ！」

「(痛そうな吐息) ふーっ、ふーっ……！ はっ、ははっ…… もしかしてよお……勘違い、しちまったか……？」

「乳首に、クリに、マンコ.....鍛えられない弱いところばかり責めて、アタシを追い詰めたからって.....」

「自分が強くなったと思って、鞭打ちか？ ははっ、バーカ。そんなわけ、ねえだろ.....おおッ.....」

「な、何度でも、やってみろよ。ひっろい背中に、ぶっとい足、そんで、バキバキの腹筋.....そうだ、アタシは.....」

「アタシは女戦士.....どんだけ弱点が増えたって、鍛えた体が.....んんッ.....♥」

「は、あ.....ッ♥ はいはい、淫紋ね...♥ おう、やればいいじゃねえか。クリか？ 乳首か？ お前らが勝つ手段なんて、それしかねえもんなあ.....」

「うっぐっ♥ ああ.....？ どうした？ 背中なんて叩いても、おっ。意味、ねえだろ。大人しく、ふぐっ.....♥」

「お、お前らも、しつこいよな。やる時もねちっこいし、ぐっ♥ これだから、帝国人ってやつは.....あッ」

「は一つ.....は一つ..... なに？ 鞭乞い豚の姿勢だと？ ははっ.....わかったわかった」

「今のままじゃ勝てないから、姿勢を変えて打ちやすくしてくださいってか。へなちょこにも程があるぜ。んつく.....っ♥」

「しょうがねえな。だらしないご主人様の為に、一丁やってやるよ。分かってる」

「頭の裏で手エ組んで、足はあれだろ。東の戦士がよくやる、蹲踞ってやつだ。よかったなあ。これでマンコ叩きやすくなってよお」

「おう、ご主人様。これが鞭乞い豚の姿勢ってやつだ。奴隷に鞭打ちしたいのに、上手く叩けないよ〜〜って時には、泣いてお願いするんだな」

「うおおッ♥ じよ、上手上手。しっかり叩けて、偉いじゃねえか。おッ、と。ふー、ふーっ.....」

「どうしたあ？ でっけえ胸だから叩きやすいだろ？ おッ！ そ、そーだ。胸の、真ん中、んっ♥ そこがアタシの弱点だ。よく狙って当ててみな」

「うぎッ.....♥ へ、ヘタクソだな.....！ もっと、おッ♥ んんッ、あッ♥ ふぎッ...iiiiii.....ッ♥」

「はーッ.....♥ はーッ.....♥ な、なんだ.....？ さっきから、乳首でもないのに、おおッ.....♥ なんで、こんな.....んっあああッ♥」

「お、おかしい.....ッ！ なんか、しやがったな.....おッ♥ あっぎッ♥ んッおッ♥♥」

「ううう……ッ♥ こんな……あッ♥ 胸が、胸全部が、乳首みたいにい……♥ うおおお
ッ———ッ♥」

「おッ、ふッ……う、うそだろっ……アタシの胸が、アメガンの加護を受けた体が、こんなッ、お
あッ♥ あああッ♥」

「う、打たれる度に、響いて……ッ、うぎッ♥ そんな、また、弱く……ひいあゝあああッ♥♥」

「あッ、ぐう……！ だめだア……ッ♥ もう、ここも……ふぎッ♥ うぎッ♥ ど、どこって、ここ
だよおッ♥♥」

「このデカイ乳ッ♥ デカいたッ♥ ふあゝあッ♥ どこ叩かれても気持ちイッ♥ 鞭打たれてッ、」

「ぶっ叩かれてッ、いっぎッ♥ 真っ赤に腫れてッ……じんじん、響いてエッ♥ イクッ♥ 鞭イキくるッ
♥ うほおゝおおお———ッ♥♥ 」

「おッ、おおッ……！？ うそ、だ……ッ♥ ち、乳が、あふれて……おッ♥ イ、いいイ……ッ♥」

「はっ♥ はア〜〜ッ……♥ お、お前ら、よくも……よくもお……(泣く)」

「分からねえ、だろうな。アメガンの女にとって、これが、どれだけ神聖なものか……」

「お前らは、やっちゃいけないことをやったぜ……！ アタシは、絶対……んぎゃあゝあ
あッ！！？？」

「あッ、あゝア……ッ！？ てめえら……ッ、また、乳を……ッ、あゝあッ♥ 殴るなッ、叩くなアッ……
！」

「はぐあゝあッ！？ いいいイ…ッ♥ おッ♥♥ ふぎゃあッ♥♥ うッ、ううううう〜〜〜ッ……
！！」

「ちくしょおッ♥ ちくしょおおお〜〜〜！！ 腹にこいッ！ こいよッ！ 鍛えたところを殴ってみ
ろッ！ おッおおおッ♥♥」

「柔らかいとこばっか、狙いやがってエッ♥ うんぎゃッ♥ あぐあゝあッ♥♥ ひきょーもんがッ、んが
あああッ♥」

「おおッ♥ 殴るなッ、潰すなあッ！！ 乳噴くッ♥ ふっがッ♥ 出るッ♥ あふれりゅッ♥♥ うう
う——ッ♥」

「うッ、ふうッ……♥ こい……ッ♥ はらに、こい……っ！ アタシと、しょうぶ、しろお……」

「あ——っ……♥ お——っ……♥ あ——っ……♥ お——っ……♥」

「う、お……かかって、こいよ…… きたえたからだで、しょうぶしてやる……むっぐうッ……」

「うッ、ううう……ッ、おうッ…！ んっ、んんっ……！ へえ～～っ……へえ～～っ……ふんッ」

「へ、へへ。痛いか……？ ちゃんと力いれたら、こんなもんだ。はは、勝てる…まだ、腹筋なら、勝てる……んっお」

「…なるほどねえ。真正面からじゃ敵わないから、脇腹を……うぐッ！ おッ、あッあッ…… ふーっ！ ふ～～っ…！」

「効か、ねえよ……他のところが、どれだけやられても、ぐちゃぐちゃにされても……んッうんん……ッ！」

「はっ、はっ……聞いているかよ、ご主人様。帝国の兵隊でも、力じゃアタシに敵わないんだ」

「もしかして、アタシが弱いと、思ってたか……？ 残念だけど、これが現実だよ。だから……おッごッ……！？」

「んッ、ほオ……ッ！ な、ナックル、ダスター、か……素手じゃ敵わないからって、うおおッ」

「ぐッ、ぐっふ……ッ！ まけ、ねえ……おうッ！ まけて、たまるかア……ッ！ おッおッ！ ふんッ！ ぐうううッ……！」

「アタシはッ、誇り高き女戦士ヴァレイサッ！ お前らクソツタレの帝国貴族には、絶対負けねええッ！」

「はっ、はっ、はあ……っ…… うっ♥ きたな、淫紋……っ♥ あ？ なに笑ってんだって？ だって嬉しいじゃねえか」

「アタシの腹筋に勝つのを、諦めたってことだろ？ つまり、アタシの、勝ち……ふっごおおおおッ♥」

「おッ、あッ…！？ あッ、ああ……ッ♥ あ？ あ？ ああ…？ いや、うそ、ちが……」

「い、今のは！ 今のは気い抜いてたからだっ！ こいつ！ もう一回こい！ 今度こそ、跳ね返してッ、んがああああッ♥♥」

「おッおッ……ッ♥ そんなっ……腹が、腹が……ッ♥ おッううッ♥ んほおッおッ♥ おッほおおッ♥♥」

「なん、で……ッ♥ こんな雑魚のパンチが……んッおッ♥ 腹に、めりこむんだよお……ッ♥ んおッうッ♥」

「うううッ……ちがう、ちがう……ッ♥ こんなのアタシの体じゃないっ、うそだッ、うそッ、おッおッ♥♥」

「やめろッ、叩くなッ、今は、ふおッおんッ♥♥ うッ、でッ……うあッ、みるなッ、うああああ～……ッ」

「ち、ちがう.....も、漏らしてねえッ、これは、腹殴られて、涎が出た音で、おッああッ♥♥」

「も、もうっ、もう.....やめてくれ.....ッ♥ 叩かないで.....ぐおッ♥ ちょっとだけ、休ませ.....ふおッ♥」

「治るッ、治るからッ.....ちょっと休んだら、また腹筋が.....ああおッ♥♥ おッ、おおお.....ッ♥」

「ちがう.....よわくない.....マンコじゃねえ.....ここはッ、はがあッ♥ あッ♥ おおッ♥ええッ♥」

「うおっ.....うおおお.....！ なんでだよお.....力、入れてんのに.....こんなにかってえのに.....おっごおおおッ♥♥」

「おッへえ.....ッ♥ なんで、こいつらのパンチに.....勝てねえんだよオ.....ッ」

「おッ♥ おおうッ♥ うッ、ううう〜っ！ もう、叩くなアッ♥ 叩かないでくれえッ♥」

「みッ、みとめないッ.....みとめたくないよオッ！ でもッ、おおッ♥ んぐッ、ほおおッ♥」

「腹が疼いてッ、どうしようもねえんだッ♥ どんなに締めても、全然勝てねえんだッ♥ もう、もう.....うおおおッ♥♥」

「ここッ♥ ここはマンコッ♥ 腹筋マンコッ♥ よわいよわい腹筋マンコなんだッ♥♥ おッごおおッ♥」

「おおッ♥ パンチめり込むッ♥ 腹イキするッ♥♥ んほッ、おッおッ♥♥ やめてくれッ、へえええッ♥♥」

「マンコ突かれてイクッ♥ おッ、殴られてッ、イツ、イツ、イグッ♥ おッ♥ ぐおッ♥ ふうおッおッ.....ッ♥♥」

「ふお.....おッ.....ひゅーッ.....ひゅーッ.....♥ うおッ.....ま、まだ、イ、イ、く.....っ♥」

「う、うう.....っ、たのむ、ご主人様.....淫紋は使わないで.....ここは、殴らないでくれ.....」

「アタシの、誇りなんだ.....この鍛えた体で、どんな苦難も、乗り越えてきたんだ.....」

「ここを、滅茶苦茶にされたら、アタシはどうすれば.....おッ♥ ううっ.....たのむ...！ マンコ、マンコを.....んッおッおッ♥♥」

「おッ、ぽオ.....ッ♥ ゆるして、ゆるしてくれっ、んぐおッ♥ 腹筋マンコ、エグらないでえッ.....♥」

「おおーっ.....♥ お願いだ、ご主人様ァ.....他のどこを、おうッ♥ どのマンコも、使っていいから、ここだけは.....ふうんッ♥」

「ここだけは、強いままで、いさせてくれえ.....ッ」

「うお`ッ♥ うう、もう、やめて……ぐほッ♥ おお`ッ、腹が、イカレ……ん`ッほお`ッ♥ おふーっ……♥ おふーっ……♥ う`おおおッ……♥」

■5 逃走時の対応 二度と逆らえないようにするには

「はあ、はあ……ッ！ あ、足が……ッ！ クソッ、やられすぎて腰がガタガタだ……！ あいつらめ……うッ…！」

「ちくしょう、もう追いつかれちゃったのか…？ 全力で、走ってきたはずなのに……ッ！」

「…まあいい。こうなったら、てめえら全員ぶっ飛ばして、堂々と脱獄してやるさ」

「へっ。今までは、がんじがらめに縛り付けて、好きにいたぶってくれたよな。今回ばかりはそうはいかねえぞ。うお……っ♥」

「ふ、ふんっ。淫紋さえ使えば、勝てると思ってんのか…？ 今日はいくらでもやり返せるんだ。お前らなんて、一発で……くふっ♥」

「ん、んん……っ♥ くそお……息を吸っただけで、腹の奥、疼いて……っ♥ ふーっ、ふーっ……♥ でも……でも……！」

「監獄のガキどもだって見てるんだ……！ アタシは戦士、斧熊ヴァレイサ……！ みんなのために……！ そして……うっぐっ♥」

「はーっ♥ はーっ♥ 頼む……！ アメガンの加護を……アタシに、この鬼畜どもを倒す力を……！ おおおおー……っ！」

「ん`おおおうッ♥♥」

「ん`ッ、お`おッ……♥ にや、にやんでッ…よけられにや、お`ひよお`おうッ！？ んがッ♥ ふお`おおお……ッ♥」

「ひよ～～っ……♥ ひよ～～っ……♥ ま、まだまだあ……！ お、おおお……っ！」

「ど、どーだあ！ こーして、うずくまってるや、腹筋マンコ、殴れないだろお……ッ♥ 」

「い、今のうちに、回復ッ、ふんぎゃッ♥♥ け、ケツッ♥ ケツ叩かないでッ♥ 蹴らないでッ♥ あぎゃあああッ♥」

「マンコ蹴るなッ♥ 蹴るなアー……ッ♥♥ うおッ、うおおおッ！ マ、マンコ隠さなきゃ……ッ、あぐうッ！」

「あひっ♥ いひいっ♥ む、鞭にも、負けな……ふおおっ♥ おおっ、マンコ叩くなっ、はぎゃっ♥ ち、乳首がア……っ♥」

「ちくしょおっ…！ 乳もケツもデカすぎてっ、両手じゃ守れねえよオ……もう、とにかく耐えるしか……うぎっ、ぎいっ！」

「ひいーっ、ひいーっ……！ あっ、頭おかしくなりそうだっ……でも、まだ……ふん`にゃああああああッ♥♥」

「おお`っ♥ おっぱい踏むなっ♥ 潰れるっ♥ 出るっ♥ 乳イキするウーーーーっ♥ うお`っ♥♥」

「ガッはッ……♥ わき腹蹴られて、腹筋マンコが……お`おおっ♥ ケツがッ、んぎゃッ、乳が……お`っ♥」

「うぎっ♥ はぎゃっ♥ うあ…っ！ あーっ！ あーっ！ うあああ~~~~~っ！！！」

「もうムリッ！ ムリだあッ♥♥ 勝てねえッ♥ もう、どうやったって勝てねえよおーっ♥」

「アタシの負けだ……頼む、もう許して……ひぎイッ♥ ゆるじてッ♥ ゆるしてくれえ~~~~~っ♥」

「うううッ！ だって、だってえ……もう、全身マンコなんだッ♥ どこ突かれたって弱いんだッ♥ こんなの勝てっこねえッ♥ うぎゃあああッ♥」

「言うッ♥ 言うよッ♥ せつめーするッ♥ クソ雑魚マンコ女だって、ご主人様に話すからあ……ッ」

「だからお願いッ、いだッ、あっ、お、お願いします……！ もう許してくれ……っ！ もう、マンコ叩くの、やめてくれえーっ！」

「へえーっ…♥ ふえーっ…♥ お`っ♥ あ、ありがとッ、ございます…ッ！ う、うううッ、感謝、しま、すう……！」

「ご、ご主人、様……今まで、さんざん、生意気言って、ごめんな……はお`っ♥ おおっ、ごめんなさいッ♥ ちゃんと話すからッ、マンコ鞭、やめてくれエッ♥」

「ううッ、どんな姿勢も取る……ッ、なんでもするっ！ だから……は、はい！ 鞭乞い豚、だな……！？」

「はーっ、はーっ♥ アタシ、さ。ずっと、アメガンの女戦士は最強だって、お前らなんかに負けないうって、言ってたけど……ウソ、だったんだ」

「アタシは、今のアタシは……全身マンコの、メス豚奴隷なんだ……ッ♥ もう、戦う力なんて、残ってなくて……ふおおっ♥」

「こ、腰も、足も、へなへなで……ッ♥ 淫紋が光っただけで、力、抜けて……ッ♥ もう、体がッ、おっ、支えられないィ……♥」

「しかも、この乳……この、重てえ乳ッ♥ こんな抱えて戦えねえよッ♥ それにッ、おおおッ♥♥」

「ちょっと鞭がかすただけで……ふおッ♥ イ、イぐッ♥ イっちまうんだッ♥ こんなでけえマト抱えて、勝てるわけねえッ♥♥」

「なんで、なんで、こんなデカいんだッ♥ くそッ、くそおッ♥ これさえなければッう、おッ♥ この、バカ乳ッ、邪魔乳ィ……ッ♥♥」

「ふーっ、ふーっ……も、もちろん、弱点は……くほおッ♥ おッ、そうだッ、マンコはっ、ここだけじゃねえ……ッ」

「おおッ、そこッ♥ ザコ乳のッ、一番ザコいとこッ♥♥ んおッ♥ ぎ、ザコ乳首ィッ♥ 」

「ビンビンに立って、いじめてくださいって言うところ……♥ うぎッ♥ 一目見ただけで、ザコいって分かるバカ乳首ィ……ッ♥」

「おおッ♥ こッ♥ ここイジられたらダメッ♥ もうだめだッ♥ うおおッ♥ バカ乳首ィくッ♥ イっちまうッ♥」

「ペンチなんか、使うまでもねえッ♥ つま先で、ぐちゅってやられるだけでッ、ふぎょおおお〜〜♥♥」

「はッ、へッ♥ んっへえッ……♥ こ、こーやって、ひっくり返って、イキ潮、噴いちまうんだあ……♥ んおッ…♥」

「おおお……っ♥ 腹筋マンコ、踏まないでェ……ッ♥ 体重、かけないでくれ……おおほッ……♥」

「そ、そーだ……きもち、いいんだ……ッ♥ もう、ここも雑魚だから……殴られなくても……ふおお……っ♥」

「踏まれて……かかとで、グリグリされて、おゝ…ッ♥ さすられて、こすられるだけで、んおッ♥ ぎもちィッ…♥」

「しょ、しょーがねーだろ…♥ ここ、もうマンコなんだよ……♥ 戦うための場所じゃないんだ……っ♥ 男に、ボコボコに叩かれるための、場所で……ぐおッ♥」

「おッ♥ そーだッ♥ そこッ♥ そこはマンコッ♥ 男に突いてもらってッ、アタシをイかせて遊ぶための、ザコザコ腹筋マンコッ♥」

「おおッ♥ 立つッ♥ 立ちますッ♥ みんなに叩いてもらうために、腹筋マンコ差し出しますう……ッ♥」

「おーッ……♥ ほおーっ……♥ ご、ご主人様……ッ♥ これが、腹筋レイプの、姿勢です……っ♥ この姿勢だと……おッほおッ♥」

「き、鍛えた腹筋、叩きやすいからッ♥ 腹ン奥の、一番弱いところまで、パンチが届くからッ♥ だから、おッ♥」

「おっ、思う存分、腹イキさせて……んごッ♥ アタシを、ぶっ壊せますう……っ♥ ふおッ♥ ふっぎいッ♥ んがッはアッ♥」

「おーっ♥ おーっ♥ む、ムリだ……もう、ああッ♥ すみませんッ！ もう、立てない……ッ♥ 腹叩かれすぎて、体動かねえんだッ♥ あああ……」

「こ、これ……っ、ここ使って……便器マンコ、使ってくれ……！ 使いやすいように、ほら、牝畜便器の姿勢、取ったからさあ……」

「はあうっ♥ ケ、ケツに鞭、やめて、ふあッ♥ 頼むッ、頼むッ♥ 便器マンコを、使ってくれ……他のところ、休ませてえ……」

「んっぎいッ♥ おッ♥ あッ、ありがと、ございます……っ！ 精いっぱい、頑張るからア……ッ♥」

「ふっおッ♥ おッおおッ♥ ここが、一番ザコいマンコ……ッ♥ これからはッ、おおッ、ここ、鍛えるッ♥ 鍛えますうッ♥」

「いッ、今までッ、ふおッ♥ 無駄な鍛錬して、ごめんッ♥ ごめんなさいッ♥ ぐおッ♥ おおおッ♥」

「女の分際でッ、牝畜生の分際でッ……♥ ふぐうッ♥ よっわいよっわい腹筋マンコ鍛えてッ♥ くおおお…っ♥」

「どっ、どんだけ鍛えたってザコいのにィッ♥ 殴って、叩かれて、イカされるだけなのにィ♥」

「せ、戦士とか言って、無駄に頑張って、ごめんッ♥ こ、これからはッ……便器オマンコ鍛えるッ♥ 鍛えますウッ♥」

「帝国の男の、ご主人様の、チンポ、気持ち良くするためにッ♥ 頑張って、鍛え……うっ、ううっ……ひぐっ、ううう……」

「なんで……なんで、こんな……アタシは戦士として……はあがッ♥ ずみませんッ！ やめてくださいッ♥ あぎゃあああッ♥」

「締めるッ♥ マンコ締めるッ♥ ペンチやめてッ♥ 鞭もやめてッ♥ おおッ♥ マンコッ、マンコマンコマンコおッ♥♥」

「もうッ、戦士じゃないィッ♥ アタシは便器ッ、便器マンコのヴァレイサだアッ♥ おッっほッ♥ ふおおおッ♥ 」

「そうだっ♥ 乳首も弱いっ♥ デカ乳も弱いっ♥ 腹筋も弱いっ♥ どこを叩いてもイキまくるっ、クソ雑魚豚のヴァレイサだアッ♥」

「どのマンコでもイクっ♥ おゝっ♥ どこでも、使えるっ♥ だからっ、だからア……♥」

「よろしくお願いしますっ、ご主人様アー——っ♥♥」

「ふあゝっ、あ、ああ……射精、ありがとっ、ござま……また、チンポを……おゝっ♥」

「おお……言葉遣いも、賤けて、ください……敬語も、頑張って覚える…うおおっ♥ 覚え、ますから……」

「は、はい……ロマンコも、ケツマンコも、開拓します……どこにだしても恥ずかしくない牝畜便器になるまで……ふごっ♥」

「ぶはっ、はいっ……チンカス、舐めさせて、いただきます……ふもっ、んぐっ」

「じゅるっ、ちゅるるっ♥ ふぶっ♥ んっぐっ♥ ありがと、ごじゃます……ふんむっ♥ ほっ♥ おっ♥ んんぐっ♥」

■6 あなたの元を買われた後で

「お買い上げ、ありがとうございます。元女傭兵の牝畜玩具、ヴァレイサでございます」

「私はヴァレイサは、性欲処理、ストレス解消、過酷な労働、と……」

「は、はいっ、なんでございましょう！ は、お、音声ガイドダンスと違う？ え？ なにが……あっぎゃあッ」

「もっ、申し訳ございません！ 申し訳ございません！ なにかご主人様の機嫌を損ねることをしてしまったのでしょうか！」

「不出来な奴隷である私に、どうかご教授ください！ お願いします！ お願いしますーっ！」

「お、音声ガイドダンスみたいに……て、抵抗しろ？ もっと強そうに……？ へ？ なんで、どういう意味……うっぎいッ」

「もっ、もうしわけありません！ 愚かなヴァレイサにはっ、少し意味が分かりかねますッ！ 」

「私は、牝畜玩具ヴァレイサでございます。性欲処理、ストレス解消、過酷な労働、いかなる方法で使い潰してくださっても構いません」

「ご使用方法につかれましては、こちらの……へ？」

「い、いやッ...！ 無理ですッ、そんなのできないッ！ あの頃に戻るなんて、もう.....ああッ」

「すみませんッ、許してくださいッ！ 鞭やめてッ、痛いッ、痛いんです！ 淫紋ッ、淫紋使ってえええッ」

「し、しんだんですッ！ 斧熊ヴァレイサはしにましたッ！ 帝国の方々に、イジメ殺されたんですッ」

「もどれッ、もどれないッ！ あの頃みたいにイ、生意気に刃向かうの、もう無理なんですッ、できなッ.....おッごおッ!?」

「おッ、ええ.....ッ ゆるじて、ゆるじてください、なんでもします、なんでもします、ご主人様あ.....」

「あッぎッ！ うごおッ!? ぎゃああッ！ やめてッ、やめてやめてッ、やめてぐれえええええッ」

「どうしてえッ！ ど、奴隷になればッ、従順になればッ、痛いことしないって言われたのにッ」

「だからッ、だから変わったのにッ！ 全部捨てたのにッ！ 惨めなマンコ奴隷に、なったのにイ.....」

「今さら戻れなんて言うなよおッ！ もう無理なんだよッ、終わったんだよおおおッ」

「無理ッ、もう無理ッ！ 負けた！ 戦士なんかじゃないッ！ マンコ豚なんだよおッ！ 」

「淫紋使ってくれッ！ ぎもちよくしてくれッ！ 痛いのはやめてッ！ やめてくれよおおおッ」

「マンコも、乳も、口も、どこだって使えるんだッ！ 気持ちいいって評判なんだッ！ だから、ご主人様.....ぶぎッ」

「おッ、んおッ！ やめてッ、叩かないでッ！ ゆるじてえッ！ もう耐えられないッ！ 戦えないんだよオ.....」

「うっぎッ、おッあッ。あぎッ、あッ.....あッ、あああああ〜〜〜ッ.....」

「わ、私は.....あッ、オ、オレは無敵の女傭兵、ヴァレイサ様だ.....こ、こんな鞭、効かねえぞ.....」

「あッああッ！ いや、もうやめて.....うッおッ、ご、ごめんなさッ、ちゃんとする、ちゃんしますうッ」

「は一ッ、は一ッ！ う、う.....な、なんだよ、この鞭。もっと力を入れて、いっぎいいい.....ッ」

「い、い、いだくねえぞ.....アタシは斧熊、ヴァレイサ様だ.....うあッ、最強の、女戦士なんだあ.....」

「ぎゃああああッ！ い、いだぐないッ！ うわあああッ、きかないッ.....！ 」

「あ、アメガン族の、誇りを……うおお……おおおおお……っ！ ひッ、な、泣いてませッぎゃあッ！
泣いてねえッ！ 泣いてねえええッ！」

「アタシはッ、負けねえぞおッ！ おごッ♥ いだいい……あだッ、い、いたくないィ……アタシは、ア
タシは……」

「最強の女戦士なんだ……だから、だから……こんな責めになんか負けねえぞ……いくらでも、
やってみろ……あッ、ぐああッ！ あああああ……」

「おっごッ！ ふぎッ！ いいいいィ……ッ！ ぎゃッ、ぐわッ、んおおおおお……ッ」